

編集後記

21 世紀のグローバル・イシューは、人口増加、高齢化、環境資源である。我々の社会科学はこれらの喫緊の課題にどのような対応策を準備できているのか。特に地球環境の持続性 sustainability に関しては、従来の社会経済システムの疲弊化、見直しは重要な仕事である。

今回、第 49 号に 13 本の多彩な論文をご投稿いただきました。所員の皆様、関心のある論文をまずお読みいただき、そのあと著者との議論を試みてください。よければ、そのプロセスを月報にご投稿ください。異分野交流が新たなイノヴェイティブな研究を生むかもしれません。

私は現在、持続性のある社会の構築に関心があります。我々が生きている資本主義社会の基盤には、しっかりと生物多様性 bio-diversity の生態系が存在している。実をいうと、その多様な生態系から、我々はいろいろなサービスを享受している。家を建てたり、森林浴をしたり、時には海岸の防潮林（防風林、防砂林など）のおかげで減災や命を救われたりと……。しかし

いつのまにか豊かな生態系の有難さを意識しなくなってしまった。つまり、あまりにも高度に効率よく社会経済システムが発達してしまい、大量消費や大量廃棄に疑問を感じなくなってしまった。気が付くと廃棄物が増え、環境が悪化し、自然資源が枯渇し、原子力依存の社会に突入していた。今こそ、国家の役割が問われている。テロを行うのも「国家」である。「成長なき時代」を生きる国民に幸せをもたらすのも資本主義国家である。家族－市民社会－資本主義的国家、これらの関係が健全にリンクされればいいのだが、ローカルやグローバルなレベルで、人種差別や社会的排除が見受けられ、紛争やテロが常態化している。

個人や家族の顔や姿が見えにくくなっている。そして多様化が進む地域社会も不安定な側面が前面に出てしまっている。「多様化が認められる社会」を世界に普及するにはまだまだ時間が必要である。

(福島義和)

編集スタッフ	福島 義和 (文学部)	内藤 光博 (法学部)
	前田 和實 (商学部)	新田 滋 (経済学部)
